

お客様はカミサマでした。

「僕カミサマなんだけど」

レジ画面に映されたアイスココア三四〇円の表示。レジの前には小さな小さなお客様。百二十センチ弱の背。まっくろでまつすぐな短い黒色の髪。私を見上げる大きくてくりっとした目。

「お姉さんはカミサマからお金を取るつもりなの」

幼さがあるにも関わらず、なぜか凜とした雰囲気も醸し出す声でした。背筋を伸ばして、半ズボンから半分だけ白い膝を覗かせて、手ぶらの指たちを後ろで絡ませて、彼はそう言ったのです。

「あら」

私は開いた口を手のひらで隠しました。彼を見て、三四〇円を見て、彼が座っていたテーブルに置かれた空のグラスを見て、彼を見て、私は。

「たいへん失礼いたしました」

カミサマにうやうやしく頭を下げたのです。

* * *

カミサマは毎週土曜日の午後三時にいらっしゃいます。

「いらっしゃいます、カミサマ」

からんからんとドアに掛けたベルを鳴らして、カミサマは入店されます。当店はしがたない喫茶店ではありますが、少し洒落っ気づいてログハウス風にしたところ、ドアが少し重たい仕様になってしまいました。なので背に少しコンプレックスを抱いていらっしゃるカミサマは、いつも苦労してドアをお開けになります。私がお手伝いしようとするカミサマはお怒りになってしまいますので、私はゆっくりとカミサマの入店をお待ちいたします。

「相変わらずお姉さんのお店のドアはどうかしてるよ。集客のためにも軽量化を図るべきだ」

「お言葉ですがカミサマ、私はドアが重かろうと、私の作った料理や飲み物をおいしく召し上がりたいと思って来てくださる方が、ひとりでもいらっしゃれば幸せなのです」

カミサマは不服そうに私を見上げました。そして、「だから」と口を尖らせるのです。「だから今日もお客さんがいない」

「カミサマがいらっしゃいます」

「僕だけだ」

「カミサマがいらっしゃれば、私は幸せです」

カミサマの頬がみるみると、採れたてのリンゴのようにつやつやした赤さに変わっていきまし

た。ふいと私から顔を背けると、カミサマはカウンターの、いつもの一番端に座られました。先ほども言いましたが、カミサマは背が少し小さめでいらつしやいますので、カウンターの席をいつもよじ登るような形になります。

「おほん、と咳をされて、カミサマは改めて私の目をじつと見上げます。

「アイスココア」

「はい、かしこまりました、カミサマ」

ロングスカートをちょいとつまみ上げて、頭を下げるとカミサマはご満足そうに笑いました。私はその笑顔が好きです。欲しいものをすべて手に入れたようなその笑顔にいつも、最高のアイスココアをご用意せねば、と意気込むのです。

私は本年二十六歳になるただのおばさままでございます。つい先日までがないケーキ屋の店員でしたが、いろいろな過程を越えて自身で喫茶店を経営することになりました。その過程の詳細は、今ここでお話することでもないでしょう。

喫茶店と言いつても、特に利益追求もせず、個人でひっそり経営しているため、一日にいらつしやるお客様はほぼ片手で足るほどです。その指にお入りになるおひとりがかミサマなのです。カミサマはとても不思議なお方でした。一見小学三年生くらいの男の子にしか見えないのに、お一人かつ手ぶらでいらつしやってアイスココアを注文し、きっちり氷までがりがり召し上がったあと、なんと自分はカミサマだからお金は払わないとおつしやったのです。カミサマが無銭飲食なさることに大変驚きましたが、でもカミサマだから無償で物を貰うことに慣れていらつしやるのかもしれないと思いました。なにより、半ズボンを履いた小さなカミサマが私を見上げていらつしやるということが、私は大変愉快に思ったのです。ですので、私はカミサマが当店にいらつしやる度に、カミサマご所望のアイスココアをお供えするのです。

「こんなにお客が来なくて、よく潰れないよね」

カミサマが呆れたようにおつしやって、ストローからアイスココアを召し上がります。私はカミサマのお隣に座りました。他にお客様もいらつしやらないので、特に一目を気にすることもありません。

「お金はそこそこ貯めてきたので、今の状態でもあと一年ほどは続けられると思います」

「一年経ったらどうするの」

「そのとき考えます」

カミサマは少し不服そうな、さみしそうな、そんな顔をして、最後には不機嫌そうにまた口を尖らせストローをくわえました。カミサマはいつも、アイスココアをゆっくり、ちまちま、味わうように召し上がります。その間に私とお話してくださったり、ときにはずっと黙ってお飲みになったりして、飲み切るとおもむろに氷を口の中に入れてがりがりと噛み砕いていきます。

「カミサマ、それはお行儀が少しお悪いと思います」

ずっと思っていたことですが、勇気を出してわざとらしくそう申してみました。するとカミサマはますます不機嫌になられて、眉間の皺が深くなり、ふいと顔を背けました。

「カミサマはなんでも許される」

そうおつしやり、がりがりとカミサマは氷を噛み砕きつづけけます。沈黙が一分ほど続いて、「こ

「これは」とカミサマが呟くようにおっしゃいました。

「これは、子どもっぽいかな」

私は思わずきよとんととして、それから吹き出してしまいました。カミサマの顔がまたもや林檎になられていきます。

「な、なんだよ！」

「いいえ、いいえ」

くすくす笑いつづける私を、カミサマは林檎のままきつと睨みました。すみませんと頭を下げて、こほんとかをして、私はまっすぐにカミサマを見つめて笑ってみせました。

「それは誰もが羨む行為です、カミサマ」

「ごちそうさま」

アイスココアを完食されて、カミサマは席から下りられました。私も下りて、ドアへご案内します。もちろんカミサマはカミサマですので、レジは素通りされます。そして毎回、ドアの前で立ち止まり、私と向き合います。

「ありがとうございます」

「それは何よりです」

カミサマは拳を私の目の前に突き出しました。そしてぎゅつと力を込められます。

「あん、でゅー」

そして少し舌を甘くしてカウントを始めて、

「どうろわ」

ぼん、と一瞬にして、カミサマの手に一本のまっかな薔薇が現れました。

「はい、いつものお礼だよ、お姉さん」

「はい、いつもありがとうございます、カミサマ」

両手で薔薇をいただくと、カミサマはまた満足そうに笑いました。これがいつもの土曜日。カミサマがいらっしやって、アイスココアを召し上がって、一輪の花をいただく、ゆるやかな約四十分なのです。

* * *

「ただたかりに来てるガキじゃないの」

ばっさり判決を下した友人の顔はとても呆れてしますと主張するものでした。そんな水曜日の午後十二時半。

私の友人は会社でばりばり働くサラリーウーマンですが、ときどきこうしてお昼ご飯を食べにくてくれます。今日注文してくれたのはパンケーキ。ふっくら厚めに焼いたパンケーキに、ブルーベリーのジャムをかけ、さらにチョコレートソースをかけ、最後は真ん中に薔薇の形にした生クリームをぼんとのせてみました。甘党の甘党を自称するお客様は、いつも甘い甘いランチをご注文されます。

「カミサマなんて嘘に決まってるじゃん。まあ、あんたもわかってるでしょうけど」

眉間に皺を寄せたままパンケーキを口にすると、友人の顔は一瞬にしてへにやりと柔らかくなりました。カミサマへの怒りよりも、パンケーキの祝福に屈伏したようです。

「でも、本当にカミサマかもしれないし」

「本気で言ってるの」

うふふと笑ってみせるとまた友人の眉間に皺が生まれます。ころころ表情が変わって忙しい人です。

「一瞬でお花を出すことが出来るのよ。タネもシカケもまるで無いように」

「手品はタネもシカケもまるで無いように見せるもんなのよ。覚えましょうね」

「お金の代わりにそのお花をくれるの」

「気障で詐欺な子どもね」

手厳しいお言葉です。友人は傍にある透明の花瓶に差された一輪の赤い薔薇を見て、ますますしかめっ面をしました。友人はカミサマのことがどうしてもお気に召さないようで、もし二人が会うことがあれば壮大な口喧嘩になってしまうのではと予想します。カミサマも刃向かわれど刃向かいたくなるお年頃のようなので。

「そのカミサマとどんなお話をされているわけ」

「そうね、この間はこのお店をいつまで続けるか聞かれたので、一年ぐらいでやめるとお答えしたわ」

「そのほかは」

「いつもはお花の話とか虫の話とか、カミサマは自然が大好きみたいだからよくそういう話をされて、私はずっと聞き手に回っているわ。あと、私のことについてご質問されることもあって、そのときは私がお話して、カミサマはずっと聞いていたりとか。あ、この間はね、私がお店を開く前に何をしていたかを聞かれて」

「もういいわかった」

心底呆れた顔をして、もう諦めたのか友人は黙ってパンケーキを咀嚼します。そして、はあ、とため息を吐きました。

「あんたのパンケーキはどこよりもおいしい」

「お褒めに預かり光栄です」

「ほんとに一年ぐらいでやめちゃうの」

友人のさみしそうな声が、カミサマの声と重なりました。うん、と私は二人分のアールグレイを用意しながら頷きます。「さすがにこのお客様さんの数ではお金も敵しいし」友人以外誰もいない店内を見渡します。

「わざと集めないようにしてる節もあるけど」

「だって、お客様がいっぱいいらっしやると、こうしてゆっくりお話できないじゃない」

できあがったアールグレイを差し出すと、おっと友人の眉が上がって手を伸ばしてきます。

「やめたあとはどうするの」

「そのとき考える」

「実にあなたは自由人だなあ」

なんだか嫌味たらしく言われてしまったので、アールグレイを下げてみると、友人は慌ててカップにしがみつきました。

「ね、さっきのカミサマ坊主の話だけ」

「だから大丈夫だって」

「そもそもなんで名前も知らない子どもに、ただで飲み物奢ってんの」

とても今更な質問で、逆にすぐに答えられませんでした。どの言葉も合っているようで合っていないくて、でも、やはり答えは一つなのです。

「だって、カミサマが私めのお店なんぞにいらしてくださいさるなんて、ただただ面白いじゃありませんか」

うふふ、と笑ってみせると、友人は今まで以上に呆れた顔をして、奪い取ったアールグレイでお口を濁すのでした。

* * *

「どうしてカミサマは、私の店に来てくださるのですか」

アイスココアをお出しして、いつものようにカミサマの隣に座ります。今日も今日とて店内はカミサマおひとりのもの。カミサマは大きな目をさらに大きく見開きました。それほど驚くべき質問だったでしょうか。

「……すごく、今更な質問だ」

「この間友人と話してしまって、そういえば私はカミサマのことを何も存じてないなと思ってしまう」

「僕のこと、他の人に話したの」

「はい。いけなかったでしょうか」

いけなくはないけど、とカミサマは眉間に皺を寄せて、アイスココアで口を濁しました。気は合いそうなのに、やはり会わせるのは難しそうです。

「カミサマ、お答えを伺ってもよろしいでしょうか」

じっと見つめてみると、カミサマはうっと息を詰まらせて、ほのかに頬を紅潮させながら目を逸らしました。少しばかり沈黙の時間が過ぎます。そして、ゆっくりとカミサマのお口が開きました。

「僕ね、実は仕事をサボってきてるんだ」

「おしごと」

「うん、カミサマのおしごと」

ずず、とアイスココアを飲みきった音。カミサマはストローをよけて、アイスココアのしみた氷をひとつ口へお入れになります。

「平日はそれなりに頑張ろうと思うんだけどさ、やっぱり土日はのんびりしたいと思うじゃない」

「カミサマにも曜日感覚はあるのですか」

「だからこっそり抜け出して、ここにお忍びしてるわけ」

お忍びという言い方が合っているのかわかりませんが、突っ込まないでおくことにしました。がりがり氷を食りなされるカミサマは、さっそくひとつ目を完食してふたつ目に突入します。

「じゃあ、いつもくださるお花は」

「仕事場から貰ってきてる」

「大丈夫なのですか？」

「一本くらい問題ないよ。それに、お姉さんが」

「私が？」

「その、よ、ろ」

そこでカミサマが思い切り咽せました。氷の大きな固まりをつい飲み込んでしまったようです。私は慌ててカミサマの背中をさすり、しばらくするとぜえはあとカミサマが肩で深呼吸しようとしています。息が一瞬できなかった所為か、顔が赤くおなりになっていました。

「と、とにかく問題ないから」

「はあ、わかりました」

生返事しかできない私にカミサマは、うむ、とわざとらしく頷きます。そしてみつつ目の氷をがりがりされます。がりがりがり。

「お姉さんは、どうして僕のことを知りたいと思ったの」

「どうしてって」

「なんとなくなら、それでいいけど」

「そうですね、なんとなく、カミサマのことをもっと知りたいなって」

がりがりがり。氷をあと五回ほど噛んで、カミサマは少し俯かれました。

「お姉さんは」

「はい」

「お姉さんは、どうして僕にアイスココアを出してくれるの」

やはり友人とカミサマは似た者同士の様です。私はまた答えを迷って、しかしまた、同じ答えを出しました。

「楽しいからです」

「たのしい」

「あなたが私のアイスココアを美味しそうに飲んでくださるのはとても嬉しいです。あなたとお花のことを話したり、カミサマが私のことを聞いたり、私がそれに答えるのもとても楽しいです。そして、最後にカミサマがお花をくれるのも、とても嬉しくて、楽しいから、だから、……です、かな」

最後をうまくまとめられなくて言葉がぼんやりしてしまいました。いつのまにかカミサマは私の方をじっと見ていて、見返すとすぐに目を逸らされてしまいます。カミサマの頬はほんのり林檎色でした。この方には林檎色がよくお似合いになります。

「お姉さんは、楽しいことが好きなの」

「みなさん好きだと思いますよ」

「僕といると楽しい？」

「はい、とっても」

カミサマは何かおっしゃろうとして、開いた口は空気だけを召し上がりました。店内がより静かになります。私も空気を食べてみましたが、特に美味しさはありません。

「前までは、ただ外をぶらぶらしてただけなんだ」

まるで独り言のように呟かれたので、私は返事をするかどうか迷います。

「偶然ここを見つけて入ったけど、見るだけのつもりで、本当は何も注文する気なんてなかった」
からから、グラスの中で揺れるあとひとつの水。

「入ったらお姉さんがいて、お姉さんを見て、なんとなく、なんとなくなんだ。この人が作ったココアを飲みたいなって、この人としやべってみみたいなって」

じわじわと滲む顔の赤さは、さきほどと同じようで違うようです。ごくくん、水を飲み込む音。「ごめん、いつもお金払えなくて」

カミサマから謝罪されるのは生まれて初めてでした。きよんとしているとカミサマは続けません。

「僕まだ、カミサマ見習い、だから、ちゃんとその、人間のお金を使うことがあんまり出来なくて。だから、毎週お姉さんに払うお金もなくて、お姉さんに迷惑かけてるのはわかっているんだけど。でも、お姉さんのココアはおいしいし、僕は、お姉さん、と、もっと」

そこで声が区切られて、「結局、ただの言い訳なだけ」と、カミサマは弱くそうおっしゃり、口を閉ざしてしまいます。私はあたたかくなる心臓を隠さずに、座ったまま足を揃えて、ゆっくりとカミサマに頭を下げました。

「それは私めにとつて、とてもとても光栄で、幸せなことでございます」

カミサマは何も言いませんでした。最後の氷を口に入れ、がりがり噛むと、さっきの反省も忘れて一気に飲み込みました。

「本当にやめちゃうの」

すぐには質問の意味を捉えられず、私は少し頭を傾げました。ああ、と思い当たって、私は頭を戻します。

「おそらくは、やはり一年ぐらいでお金はつきるか」と

「それからどうするの」

「カミサマは友人と同じことをお聞きになる」

「どうするの」

「新しく楽しいことでも探します」

二度目のぼんやりした言葉を返してしまうと、カミサマは口唇を小さく噛んでまた俯かれます。なにか言いたそうな、言いたくなさそうな、少し痛みを抱えたような表情に、なんだか私も胸の奥が痛くなるような気がして。

沈黙が数分続きました。お客様はいらっしゃいません。カミサマが急に椅子から降りて、ドアに向かわれます。私も慌てて後ろに添います。静かな店内で、カミサマはドアの前で立ち止まって、息を吸い、吐くと、私に振り返りました。

「僕もさ、すきだよ」

まっすぐに私を見上げる、まっくらで大きな目。私もちゃんとまっすぐに見つめ返します。

「お姉さんとしやべるのも、お姉さんのココアも」

「はい、ありがとうございます」

「だから」

ぐっとカミサマは拳を前に出されて。

「今からお姉さんに魔法をかける」

「まほう」

「あん」

いつも通りの合図。

「でゅー」

いつも通りの手。

「どうろわ」

いつもと違う、カミサマの手に握られた私の手。

「やめないで」

小さな手。あたたかい手。やわくて小さくて、どこまでもまっすぐな声。

「僕がお姉さんのこと、ずっと楽しませてみせるから。だから、僕がちゃんとお金を払えるようになるまで、ここからいなくならないで」

引き止められるように、ぐ、と弱く手を引つ張るような、仕草。

それから私たちは黙ったまま、ずっとずっと見つめ合って、お店の中は静かなままで、それを破ったのは、へにやりと笑った私でした。

「お金を払えるようになるまでいいんですか？」

一瞬にしてカミサマの顔がタコさんになります。耳までまっかつかで、私に伝染しそうなくらいです。

「お姉さんはいじわるだ！」

「うふふふ」

「うふふふじゃない！」

ゆるやかな土曜日の午後三時五〇分。私はゆつくりと、カミサマの手を握り返すのでした。

* * *

私のお客様は、カミサマでした。

「いらっしやいませ、カミサマ」

カミサマは土曜日の午後三時に、からんからんとドアに掛けたベルを鳴らして入店されます。当店はしがない喫茶店であるのですが、少し洒落つ気付いてログハウス風にしたところ、ドアが少し重たい仕様になってしまいました。しかし最近カミサマの背がお伸びになられたおかげが、カミサマもドアの開閉に苦を感じないようになられたようです。そろそろ視線の高さを追い抜かれてしまいそうで、うれしいようなさみしいような、複雑な乙女心です。

そういえば先日、ようやく長年の時を経て、カミサマと私の友人が会う機会を設けることができました。予想通り口喧嘩になったり、勝敗はカミサマに上がったたり、なぜか私を取り合うような形になったり、とても楽しい一日だったものです。

私は入店されたカミサマの姿を目にすると、びっくりして口に手のひらをあてました。

「カミサマが、学ランを着ていらっしやる！」

「この度、無事に階級昇格となりました」

冗談を混じらせたようにカミサマは笑います。静かな店内を見回すと、はあと露骨にため息を吐かれました。

「相変わらず暇そうだねえ、今日なんてひとりもないじゃん。よくやっていけてるよね」

「なんとかばちばちやっていますよ。誰か様のおかげで」

そう返せば、カミサマは得意気ににやりとされました。そして、ゆつくり優雅そうに、手のひ

らを出して、やわらかく何かを握るように拳を作ります。

「あん、でゅー、とうろわ」

ぽん、と合図と同時に出てきたのは、一輪のまっかな薔薇と、私がプレゼントした黒のお財布。

「今日はアイスココアと、それからブルーベリージャムの。パンケーキでもいただこうかな」

気取ったふりでそう言って、カミサマはいつものように薔薇を私に差し出します。「あら」だから私もいつものように、驚いたふりをして、へにやりと笑う目を隠せないまま、再び口に手のひらをあてるのです。

「カミサマが、人間の貨幣を持っていらっしやる」

終